8 月 7 日のメッセージ

聖書：コリントの信徒への手紙一　12：　14 – 26

「一つの部分が苦しめば」

神の助けの中で隣人と共に生きていくこと。それがキリスト者の歩みです。しかし、「隣の芝生は青い」。もちろん、自分も救いの内にあるのですが、なぜかいつも隣がうらやましく思えます。

神は、モーセが預言するばかりでなく、民の長老たちも預言できるようにされました(「主は……モーセに授けられている霊の一部を取って、七十人の長老にも授けられた。……彼らは預言状態になった……」民数記 11:25)。それはほとんどの者にとって一瞬の出来事でしたが、なおその力が与えられる者もありました(「宿営に残っていた人が二人あった。……霊が彼らの上にもとどまり……」民数記 11:26)。ヨシュアはその状態を止めさせるようにモーセに進言しますが、モーセはその訴えを一蹴します(「モーセは彼に言った。『あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。』」民数記 11:29)。恵みは独占されるべきではなく、全ての者がその喜びを分かち合うべきだと、その状態を喜ぶのです。

イエスの弟子たちも例外ではありません。弟子以外の者がイエスの名によって悪霊を追い出していると知ると、やめさせようとします(「ヨハネが……『先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと……』」マルコによる福音書 9:38)。恵みは、また権能は自分たちに与えられた特権だと思っている証拠です。イエスもまた、弟子たちの思いを一蹴されました(「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、……わたしの悪口は言えまい。」マルコによる福音書 9:39)。

また、「誰が一番偉いのか」と議論する姿は、弟子たちが常に他者との比較の中にあることを意味しています(「だれがいちばん偉いかと議論し合っていた……」マルコによる福音書 9:34)。イエスは比較そのものが全く無駄であることを明らかにされました(「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」マルコによる福音書 9:35)。

確かに人には違いがあります。しかし、神はその一人ひとりを見つめ、違いがあるままで「良し」とされたのではなかったでしょうか。そして、全ての存在が神の世界の一部を構成しているのではなかったでしょうか。

「だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。」(コリントの信徒への手紙一 12:20)

他者との比較の中で生きる者は、無力な子どもを社会のお荷物のように思っているかもしれません。しかし、子どもは神の慈しみによってのみ生きる存在です(「あなたの慈しみに依り頼みます。……」詩編 13:6)。だからイエスは、子どもを抱き上げ、「このような子どもを受け入れる者こそ、神を受け入れる者なのだ」と言われるのです(「……子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れる……」マルコによる福音書 9:37)。

「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて」(コリントの信徒への手紙一 12:24)、世界を創られました。共に世界を形作る私たちは、神の思いを受け止め、弱く見える部分にこそ配慮が必要だということを改めて思います(「体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。」コリントの信徒への手紙一 12:25)。

今、「恵まれている」と実感する者も、今、「神は私を見放した」と嘆く者も、全ては神の救いの内にあります。そして、互いが自分のことのように互いを受け入れ合う時、神の平和は実現します(「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」コリントの信徒への手紙一 12:26)。

世界平和は、まず隣人への配慮から始まるのです。